



校長室よ

「船中の文化」 — 最後の「文化発表会」

校長 木下俊児

開会のあいさつで、私はこう伝えました。

『今年で27回目、最後の「文化発表会」。「文化祭」ではなく「学習発表会」でもない。27年前の先輩方は、なぜ「文化発表会」と名付けたのだろう。』

「文化」とは、芸術や学問、技術など、人間が生み出した高い達成度を持つものだけではなく、人間が自然とのかかわりや風土の中で生まれ育ち、身に付けてきた立ち振る舞いや生活様式、ものの考え方や価値観など、生きる喜びを獲得するために形作ってきた成果（知恵）の総称である。

これを船中に置き換えると、君たちの学習の成果である展示作品やステージ発表だけが「船中の文化」「君たちの文化」ではないことが分かる。それを創り上げるために工夫したことや苦労したこと、仲間との協力によって獲得した団結力や絆、合唱に取り組む姿勢、さらには参観のルールや礼節（礼儀や節度）、企画運営の工夫なども喜びを獲得するための知恵、すなわち「船中の文化」「君たちの文化」なのである。

したがって、船中や君たち自身がこれまで身に付け、育て、受け継いできたこれらすべてをあらゆる場面で表現するのが「文化発表会」である。27年前の先輩方もそう考え、「文化発表会」と名付けたに違いない。

今日は、君たち自身を含め参観していただくすべての方々に、「船中の文化」「君たちの文化」をしっかりと伝え、感じ取っていただく1日にしよう。』

果たせるかな、この日、私は「船中の文化」をしっかりと感じ取り、「文化発表会」の意義を深く心に刻み込むことになりました。なぜなら……。枚挙に暇がありませんが、いくつか紹介しましょう。

弁論発表では、家族やまわりへの愛や感謝を、豊かな感性で素直に表現しようとする弁士の純粋さに、何度も涙してしまいました。3年生の手づくりによる演劇では、「15年後の同窓会」で再会を果たした未来の自分たちが、卒業を控え仲間と別れゆく寂しさを感じ始めた今の自分たちの姿を懐かしく回想するという、まるで鳥取市出身の漫画家谷口ジローさんの名作「遙かな街へ」を彷彿とさせる見事な演出に驚かされました。そして、故郷船岡への想いや誇り、かけがえのない仲間との固い絆の大切さを、素朴ながらも懸命に伝えようと演ずる姿に心が震えました。クラス合唱では、緊張から解き放たれた穏やかな笑顔の輪に、最優秀賞を受賞すること以上に素晴らしい何かを獲得したのだという成熟した集団の姿を見ることができました。そして、閉幕後の余韻の中、誰もが誇らしげですがすがしい表情で整然と後片づけをしている光景に、冒頭あいさつの通り、船中や生徒たち自身がこれまで身に付け、育て、受け継いできた「船中の文化」をはっきりと見るすることができました。

船中最後の文化発表会は、「船中の文化」を伝えるだけではなく、「新生八頭中学校がめざす姿」をも私たちにしっかりと示してくれました。そして、「生徒、先生、保護者や地域みなさんと一緒になって、船中のようなすごい学校を創り上げていきたい。」そう思わせてくれた1日になりました。



文化発表会テーマ



弁論発表



3年劇「15年目の同窓会」